

< 論 説 >

マズロー「1953年論文」について

— 「自己実現」者に見られる対人関係の特徴に関する調査報告書から —

三 島 齊 紀

I. はじめに

某学説を紹介・解説した教科書、また自己啓発本の類を図書館、書店、電子書籍等にて多く目にする。とりわけ現代は「自己実現」社会とされていることもあってか、「自己実現」(self-actualization) や当該概念を探求した「マズロー」(Abraham Harold Maslow; 1908-1970) の名を冠した書籍等を幾つも目にする。しかしそうした解説本や著作の幾つかに目を通すと、小生は愕然とさせられることがある。代表例としては、次のようなものがある。

<1> そうした著作の中には、マズロー理論を講釈するとしつつも、マズロー自身が書いた著作に1冊も当たることなしに(まったくの思い込みや当て推量だけで)それを行い、誤った論理展開をしているものがある。

<2> 別の書籍を手にとると、“マズローは次のように述べています”などと、マズロー著作からの引用を示唆してはいるものの、その実、当該部分の注釈箇所を見てみると、マズロー自身の論文や著作からではなく、別の解説本や教科書等に載せられている彼に関する説明文を“転記しているに過ぎない”ものがある(つまり、これも上記<1>同様、マズローの原典に当たらずして、教科書等のみを参照して彼の理論を講釈している)。

<3> 他のものでは上記同様、マズロー著作から引用というかたちで彼の著書が参考文献として挙げられているものの、マズロー著作の何頁にそれが記載されているのかに関する明示が一切なく、実際にマズロー著作を調べても、そんな彼の文言を全く見つけることができないという、恣意的な改竄により論理展開されている目に余るものもある。

このように“マズロー理論を紹介”していると公言しているものの、実は、出自不明なマズローについての講釈が無数に見られるのが現実である¹⁾。

何故、上記のような科息を数えきれないほど目にするのだろうか。こうした著者たちは、マ

ズローの言う“自己実現＝自己を実現すること（自己の潜在能力の発揮）”という思い込みが既に頭の中にプリセットされており、それが故、マズロー原著を一度も確認することなく、他者の解釈をそのまま転載したり、論理展開をしたりしていると推察される²。

そのため、こうしたマズロー原著を精読せずして憶測だけで講釈を続ける自称解説者たちは、自己の潜在能力の発揮こそが自己実現なのだから、日常生活においては“自分らしい人生を歩も

1 これら<1>～<3>以外にも、次のような粗放を目にする。

<4> マズロー自身の記した日記や著作等を一切使わず、マズロー『和訳本』だけで彼の理論を講釈している出版物も見られる。しかし訳本には、当然ながら時折誤訳等もある。しかしそうした書き手たちは原著を一度も確認していないがために、そうした訳本の和訳ミスもそのまま転記する。こうした和訳本を鵜呑みにすることの危険性については、三島斉紀、「A. H. マズローの *Motivation and Personality* に関する一考察」、『商経論叢』、神奈川大学経済学会、第50巻第1号、2014、pp.9-10. の注21等を参照のこと。

<5> マズローが書いたものとして *Motivation and Personality* なる1954年の著作がある（所謂『初版』）。同著は、マズロー自身の手によって1970年にRevised Edition、つまり『改訂版』（同著は別の箇所にて『再版』（Second Edition）とも記載）が公刊されている。この改訂版は、初版が出された後の、彼の15年以上の研究記録が彼方此方に盛り込まれた重要な著作である。即ち、この2冊の内容は大きく異なる。しかしながら、そうした自称解説者たちの中には、両冊が違うものであるということを知らずして講釈を行っていることがある（つまり、マズロー理論の変遷プロセスを知らない）。そのため、“マズロー1954年著作 *Motivation and Personality* の中には、～～と書いてあります”としつつも、そうした文言は1954年初版には見られず、実は、その言葉が1970年になって書かれたものであるという危うい紹介が多々みられる（ようはマズローが1954年に言った事柄と、1970年の中で言った事柄を混同して講釈を行っている者が数多見られる）。

<6> 上記<5>に加え、この *Motivation and Personality* なる著作は、更に1987年に編集者R. フレイジャー氏らによって、同著『第3版』が公刊された。しかしこの『第3版』は、大きな不備が見られる著作であることを指摘しておきたい。というのも、マズローが書いた文言を、編集者であるフレイジャー氏らが恣意的に多数の改竄をしており、また参考文献も勝手に加除するなどが見られる瑕疵の有する問題作だからである。つまり、マズローが言ったのかどうかも不明瞭な文言を勝手に付け加えている、学術上使用すべきではない書物である。しかし、この『第3版』だけを好んで使って講釈する研究者がいる。

<7> マズローは1965年 *Eupsychian Management* なる著作を公刊した。この著作も彼の死後、D. C. ステファンス氏らが編者となり、彼の知人たちのコメントも挟んで、*Maslow on Management* と著作名を変えて1998年に公刊された。しかし同著も、マズローが入れていた複数の章を勝手に取り除いたり、また、マズローが特別な意味を付した種々の用語を作為的に変えるなどの危疑が見られる書物である。しかしながら、これを好んで用いる研究者たちも多い（マズローによるオリジナルが存在するにも拘らず、である）。これについては、三島斉紀、「A. H. マズローの *Motivation and Personality* に関する一考察」、『商経論叢』、神奈川大学経済学会、第51巻第4号、2016、p.82の注11を参照のこと。

<8> ところで、上記の *Eupsychian Management* (1965年)は、『自己実現の経営』なる題目で和訳本が出版された。ただし注意しなければならないのは、同著が抄録版であるという点である。しかしながら、そうした注釈も一切なく、また原著も用いずに、この抄録版のみからマズローを学術書にて紹介・講釈している危ういものも頻繁に目にする。

2 河野昭三氏（東北大学名誉教授）は、「経営学の教科書等によく見られる、「マズローの自己実現概念は潜在能力の発揮である」などの解説は、経営学史上、最大のエラーと評しても過言ではない」と、この手の解説者たちを叱責している。詳しくは、C. アーヅリス著、河野昭三監訳、『組織の罨—人間行動の現実—』、文眞堂、2016年、208頁を参照のこと。

う”，“もっとすごい自分に巡り合おう”，“もっと自分に忠実になろう”，等の具体的フレーズに“レトリック”し，そうした言葉を連呼する。そうして読者たちがそれを鵜呑みにしていく流れが容易に想見できる。

こうした“自分の望むがままに生きよう”という旨のフレーズは，読者たちの耳には心地良く響くのかもしれないが，こうした姿勢は対人関係において，すぐに数々の衝突や摩擦を生じさせかねない危惧すべきものでもある。極端な例としては，他者存在を軽視して反社会的な行為をすることが俺様の自己の実現だ，ないしは他者への責任などを一切顧慮することなく無為に日々を過ごすのが私の自己の実現なのだ…との詭弁にまでお墨付きを与えかねない悪魔の呪文ともなりかねないものである。

他方で，彼の言う「自己実現」概念を現代社会で応用しようと企図し，本気でマズローの主張や枠組みを理解し，それを真摯に試みようとするならば，まずは彼自身が何を主張していたのか，その内容を“一次資料”から咀嚼していくことは必須の階梯であろう。そのため本稿では，こうした現状に対する反省を念頭に“マズロー自身”が行った自己実現者に関する一調査を取り上げてみることにしたい。とりわけ，自己実現者が見せる対人関係特性に関する1953年の報告書，精神医学的に「健全な人々に見られる愛情について (Love in Healthy People)」³を精査したい（この論文は翌年出版された1954年著作 *Motivation and Personality* の中に第13章として収められ，「自己実現しつつある人々に見られる愛情について (Love in Self-Actualizing People)」と改題された⁴。同報告書を取り上げる理由は，上述したような自己実現に関する講釈とは全く異なる旨を往時のマズローがしていたことが端的に見て取れる原著が故である。

II. 「自己実現」者に見られる対人関係の特徴

当該報告書の冒頭にてマズローは，対人関係（知人や友人間，夫婦間）でみられる“愛を示すという行為”に着目すべき必要性について述べている（この背景には，数年前まで行われていた大戦に胸を痛めていた彼の記録からも推察できる⁵）。そうであるにも拘らず，当時の心理学が“愛を示すという行為”についての探求を殆ど行っていないと彼は糾弾する。「愛情に関する被験

3 Maslow, A. H., *Love in Healthy People.*, In A. Montagu (Ed.), *The Meaning of Love.*, New York : Julian Press., 1953., pp.57-93. また，この書き物は利他愛に関する研究を行っていた P. A. ソローキンが注目していた原稿であったことでもよく知られている。Sorokin, P. A., *The Ways and Power of Love.*, The Beacon Press ; Boston., 1954., p.viii., 491.

4 Maslow, A. H., *Motivation and Personality.*, Harper&Row ; NewYork., 1954., pp.235-260. (以下，*Motivation and Personality* と略記する。また同著には訳本があるが，幾つかのケアレスミスが見られる。例えば，原著 p.350. には「1000の健全な家族 (1000 healthy families)」について記述されている箇所があるが，訳本の382頁には，「10の健全な家族」とされている。そうしたこともあって，本稿での和訳はこれに依拠しない。)

5 これは，マズローとインタビューワールである Mary Harrington Hall との対談記録である。“A Conversation with the President of the American Psychological Association : The Psychology of Universality - Abraham H. Maslow -”, *Psychological Today.*, p.54., July., 1968.

者から提供される経験的な研究は、なんと少ないのだろうと驚かされる (It is amazing how little the empirical sciences have to offer on the subject of love)⁶、と。このことは、心理学者らが自分は何を成すべきかと自問して、世に対しそれに応えていこう…とすることよりも、容易に自分が取り組むことのできるものばかりに目を向けがちだからであるとマズローは苦言を呈する。事実、こうした取り組むべきテーマを(幾つかの例外を除けば)全く取り扱っていない教科書ばかりであり⁷、愛について扱った著作は、殆ど見つけることができなかつたと彼は嘆いている。

彼曰く、こうした愛を示すことについての自身の調査は、まず、大学生たちを被験者としてスタートしたものであったとする。それは「4000人位の学生 (about 4,000 students)⁸」を相手に始めたものであったが、しかしそのうちの「1ないし2% (one or two percent)⁹」に、他とは異なる幾つかの特性が見られることに気付いたとする。そうして、「年配者 (older)¹⁰」へと被験者を広げていったことが読み取れる。

ところで、「この報告書には欠点がある」¹¹と彼はする。例えば、「プライバシーの感覚が強い人¹²」などの場合には難しい制限が幾つも見られたことから、「この研究は未だ進展中のものである (This research is still in progress.)」¹³とも自認している。

調査内容を詳述していくにあたり、彼は人間に見られる愛情関係や、対人関係を見てみると、次のようなことが一般的に観察されるとする¹⁴。即ち愛情とは、「より親しくなりたいという傾向、より親密なやり取りを望むこと、愛する人に触れたり受容したりすること、その人のために諦めるものがあること」¹⁵、「その人を見たり一緒にいることで嬉しさを感じ、また、離れることで苦しみを感じる事」¹⁶、「お互いについて、もっと多くのことを知りたいと願うこと」¹⁷等が見られる、と。しかしながら「自己実現者に関する私の研究において、とりわけ気づいた点」¹⁸があるとマズローはする。換言すれば、人口の1%に見られる「自己実現しつつある(精神医学的

6 Love in Healthy People., p.57.

7 この愛について取り扱った「私の見出したまさに唯一の例外的なものは、シモンズによる著作『人間の調整力 (Dynamics of Human Adjustment)』や、ソローキンによる種々の著作、とりわけ彼の最新の論文集である『利他愛と、それに根ざした行動の探求 (Explorations in Altruistic Love and Behavior)』がある」とマズローはしている。Love in Healthy People., p.57.

8 Love in Healthy People., p.58.

9 Love in Healthy People., p.58.

10 Love in Healthy People., p.59.

11 Love in Healthy People., p.59.

12 Love in Healthy People., p.59.

13 Love in Healthy People., p.58.

14 Love in Healthy People., pp.59-61.

15 Love in Healthy People., p.60.

16 Love in Healthy People., p.60.

17 Love in Healthy People., p.61.

18 Love in Healthy People., p.60.

に言えば健康な)人々 (self-actualizing (psychiatrically healthy) people)¹⁹における夫婦間などの身近な対人関係を見ていると、彼らには世の中の大勢を占める平均的な人間たちと比べ、幾つかの顕著な相違点が観察されるとして、10ほどの項目を提示した。以下より、それらを概観していくこととしたい。

(い) 欲求の最高次段階にいるとみられる人間には、他者の「面倒をみ、責任を持ち、欲求の共有化 (CARE, RESPONSIBILITY, THE POOLING OF NEEDS)」をするという非利己的な傾向がはっきりと見られること²⁰

肉体的強靭さこそが男らしさと考える男性は、「病気や弱さをカタストロフィ」²¹と捉える。また、「美人コンテストのような肉体的な美しさが女らしさと捉えている女性」²²も、彼女の魅力を減じる病や衰えは、彼女にとって悲劇そのものとなるということが、「あまり健全ではない夫婦」²³の間で観察される。

他方「良い夫婦においては、その一方に病が見られるならば、そのペアの一人だけの不幸というよりも、むしろその夫婦自体の病となったかのようである。等しい責任が自動的に取られるようになり、それはあたかも2人共が同時に病になったかのようである」²⁴、と。つまり「良い愛情関係の一つの重要な面として、欲求の同一化、ないし単一の階層の中に2人の人間の基本的欲求の階層が共有化されていると呼べる状態にある (One important aspect of a good love relationship is what may be called need-identification or the pooling of the hierarchies of basic needs in two persons into a single hierarchy.)」とする²⁵。心理学的に言えば、2人の人間が「一個の塊、1人の人間、1人の自我となっている (a single unit, a single person, a single ego.)」²⁶かのようにあり、「ある1人の自我が、今や2人を覆うものへと広がっている」²⁷とする。

(ろ) 「目的経験としての愛」が見られること²⁸

「欠乏動機と成長動機 (より良い言い方をすれば成長の表出) の間における差異について考えてみたい。私は自己実現者が安全、所属、愛、地位、自尊心欲求によってもはや動機づけられていない人々として定義できると考える。なぜならそうした欲求は、既に満たされているからであ

19 Love in Healthy People., p.59.

20 Love in Healthy People., pp.75-78.

21 Love in Healthy People., p.77.

22 Love in Healthy People., p.77.

23 Love in Healthy People., p.77.

24 Love in Healthy People., p.77.

25 Love in Healthy People., p.75.

26 Love in Healthy People., p.76.

27 Love in Healthy People., p.76.

28 Love in Healthy People., pp.82-85.

る」とマズローはする²⁹。例えば、「愛情が奪われてきた人」³⁰は、「愛情が不足しているが故に、そうしたものを求め欲するというを基として恋に落ちる。それは病気になりかねないような欠損に強いられるものである」³¹、と。

他方、安全、所属、自尊心などの下位欲求(欠乏動機)が既に充足されている「私の被験者たちに見られる称賛や愛というものは、殆どの場合、それそのものであり、報酬を求めない」³²ものである。彼らには「私利私欲のない称賛と利他愛(disinterested admiration and altruistic love)」³³が見られ、自分が「何かを得ようとするものではない」³⁴、「親切で心からのもの(kind, honest)」³⁵が観察される、と。

(は)「自己実現的な愛情関係においては、防御壁を取り除くこと」が観察されること³⁶

一般的に見られる異性に対する態度として「距離をもったり、ミステリアスさや身体的魅力を維持する」³⁷必要性を強く意識したりすることが観察されるとマズローはする。

他方、「健全な愛情関係においては、できるかぎり良い印象を与えようとする傾向が殆ど見られない」³⁸という。彼らの「愛情の特徴の一つに不安がないこと(one characteristic of love as the absence of anxiety)」³⁹、つまり健康な愛情関係からくる深い満足の一つに「心底からの自然さ、恐れに対する防御性や保護を十分に脱ぎ捨てること」⁴⁰ができる点が挙げられるという。このことは、お互いの「関係性を試してみること」⁴¹などはせず、「相手の欠点や弱点を許せること(allowing one's faults, weaknesses)」⁴²として現れ出てくるとする。

(に)「愛する能力や、愛される能力」⁴³も観察されること

マズローはメニンガー(K. Menninger)の著作⁴⁴を参照し、平均的な人間に見られる点について次のように述べる。「人間とはお互いに愛すことをまさに望んでいるものの、しかしそれをど

29 Love in Healthy People., p.84.

30 Love in Healthy People., p.84.

31 Love in Healthy People., pp.84-85.

32 Love in Healthy People., p.82.

33 Love in Healthy People., p.84.

34 Love in Healthy People., p.82.

35 Love in Healthy People., p.85.

36 Love in Healthy People., pp.62-65.

37 Love in Healthy People., p.62.

38 Love in Healthy People., p.62.

39 マズローは、T. レイクの著書 *The Psychology of Sex Relations.*, New York., Farrar and Rinehart., 1945., p.171. を参照するよう勧めている (Love in Healthy People., p.62., 92.)。

40 Love in Healthy People., p.64.

41 Love in Healthy People., p.62.

42 Love in Healthy People., p.62.

43 Love in Healthy People., pp.65-66.

44 マズローは、K. メニンガーの著書 *Love against Hate.*, London., Kegan Paul, Trench., Trubner., 1935. を参照するよう勧めている (Love in Healthy People., p.66., 92.)。

うやれば良いのかがわかっていないものである⁴⁵、と。他方で「私の被験者たちは愛されてきたし、愛してきたし、愛されているし、愛している」⁴⁶とマズローはする。これは全員という訳ではなかったが、「心理学的健康は愛の剥奪からというよりも、むしろ愛されることから生じているようである」⁴⁷と彼はする。つまり苦行によって、また欲求不満が良いように働くこともあるとしながらも、「基本的欲求の満足が一層の健康の基礎、ないし、土台となることが一般的に見られる」⁴⁸とする。

(ほ)「相手の個性を受け入れること、即ち、他者を尊重すること (ACCEPTANCE OF THE OTHER'S INDIVIDUALITY ; RESPECT FOR THE OTHER)」も観察される⁴⁹

自己実現者たちは、「パートナーの成し遂げた大いなることから恐れを抱くようになるのではなく、むしろそのことを喜べるという特異な判断や稀有な能力」⁵⁰が見られるとマズローはする。「こうした尊敬の最も印象的な事例は、妻たちが夫よりも、ひとときわ輝いている場合ですら、そうした妻の達成した事柄を心から自慢する、そうした男にみられる。別の言い方をすれば、妬みがないのである (the absence of jealousy)」⁵¹。「自己実現しつつある人々は、他人を何とはなしに利用・統制したり、その人の希望を軽視したりすることはしない。その人は減じることのできない基本的尊厳を持った者として尊敬に値する人と見なし」⁵²ており、かつ「他者の個性の尊重、他者の成長に熱心であること (the affirmation of the other's individuality, the eagerness for the growth of the other)」⁵³が観察される、と。

(へ)「自己実現しつつある人々の性愛」についての傾向⁵⁴

マズローは、被験者たちに見られた傾向の1つとして「健全な人々において、性と愛は互いに全く完全に融合するということが起きている」⁵⁵と記す。「確かに、私たちが研究してきた人々の生活において、彼らはお互い離れがたくなっており、そして、ますます一体化している」⁵⁶と。ただし、これは平均的な人々が見せるような、「愛は神様からの最良の贈り物であるとか、感情の高ぶり」⁵⁷という単なるロマンチックな感覚とは異なるものであり、「強烈な喜びというよ

45 Love in Healthy People., p.66.

46 Love in Healthy People., p.65.

47 Love in Healthy People., p.65.

48 Love in Healthy People., p.65.

49 Love in Healthy People., pp.80-82.

50 Love in Healthy People., p.80.

51 Love in Healthy People., p.80.

52 Love in Healthy People., p.81.

53 Love in Healthy People., p.80.

54 Love in Healthy People., pp.66-75.

55 Love in Healthy People., p.66.

56 Love in Healthy People., pp.66-67.

57 Love in Healthy People., p.69.

りは、むしろ味わわれる喜び」であるとする⁵⁸。彼らには、「自と他を健全な仕方で受容するという土台がある」⁵⁹。例えば「深遠な愛情関係から満足を得ていることから、結婚外での代償的で神経症的な不倫を探し求める必要がないかのように見える」⁶⁰と付言する。

(と)「健康な愛情関係を楽しみ、喜ぶこと」も観察される⁶¹

マズロー曰く、フロムやアドラー(Erich Fromm and Alfred Adler)は愛を示すことの特徴的な行為として、「生産的であること、面倒をみること、責任を持つこと(productiveness, care, responsibility.)」⁶²を強調した。しかし、それらは「ある種の任務や重荷」⁶³のように表現されるとマズローは指摘する。

つまり、フロムらが強調しなかった別の面が自己実現しつつある人間には見られると彼はする。それは理想的な愛情関係が、「よろこびや楽しみ」⁶⁴であるという点だとする。「私の被験者たちの間で非常にはっきりと見られる健康な愛情関係に関する一面」⁶⁵として、「それは愉快・ユーモアが見られ、遊び心のあるもの」⁶⁶、「楽しむこと、笑いを誘うもの、陽気であること」⁶⁷が観察される、と。

(ち)「健全な愛情関係において見られる、非常に優れた嗜好と知覚」⁶⁸について

「自己実現しつつある人々から報告される最も目を引く卓越したものの1つに、彼らの並外れた知覚力が挙げられる」⁶⁹とマズローは言う。彼らは「平均的な人々(average people)」⁷⁰よりも、「遥かに有効にその真実や事実を知覚することができる」、と⁷¹。

勿論、「私たちの被験者は完全なる人間でも完璧な人間でもない」⁷²、「特別な弱さを持っていたりもする」⁷³。しかしこうしたことは、「愛が盲目であるとか(中略)、自分のパートナーを過大評価する」⁷⁴傾向が見られるという、一般的に持たれている見方とは相容れないものであるという

58 Love in Healthy People., p.69.

59 Love in Healthy People., p.70.

60 Love in Healthy People., p.70.

61 Love in Healthy People., pp.79-80.

62 Love in Healthy People., p.79.

63 マズローは、E.フロムの著作 *Man For Himself*, New York., Rinehart, 1947., p.110. を参照するよう勧めている (Love in Healthy People., p.79., 92.)。

64 Love in Healthy People., p.79.

65 Love in Healthy People., p.79.

66 Love in Healthy People., p.79.

67 Love in Healthy People., p.79.

68 Love in Healthy People., pp.87-90.

69 Love in Healthy People., p.87.

70 Love in Healthy People., p.87.

71 Love in Healthy People., p.87.

72 Love in Healthy People., p.87.

73 Love in Healthy People., p.87.

74 Love in Healthy People., p.87.

のは確かであるとする。「この種の欠点が見えていないという訳ではない。それは単にそうした認知された欠点を見過ごすことができる」というものである⁷⁵。「これは他者から盲目だね…と言われるものであるが、優れた嗜好と呼ぶ方がより適切である」⁷⁶。

そうした「優れた嗜好」⁷⁷は、時に比較的健全な大学生たちにも観察される。彼らは成熟するにつれ、「イケメン」、「見た目が良い」、「良い踊り手だ」、「胸が大きい」、「力持ち」、「背が高い」、「ネッキングが上手である」⁷⁸等について「ますます魅力を感じなくなっていく」⁷⁹。そうではなく「彼らは相性の良さ、善良さ、良識、友情、思慮深さ (compatibility, goodness, decency, good companionship, considerateness) というものをよく口にするようになる」⁸⁰、つまり、「正直さ、善意、親切さ、勇気のような性格的傾向を重視するというルール (the rule with respect to such character traits as honesty, sincerity, kindness, and courage.)」⁸¹が見られだす。彼らは「肉体的な条件よりも、むしろ特性的な条件を今では口にしていた」⁸²。

(り)「泰然としていることと個性」⁸³について

我々の文化において、理想的な愛情なるものは、「完全なまでの自己の消失」⁸⁴、「個性を捨て去ること」⁸⁵とされてきた。他方で、自己実現しつつある人々はそれとは異なる。つまり彼らは、「こうした時に個性が強められている。というのも自己は一方の感覚では他者と融合しながら、しかし他方の感覚として、常に別離したり強くなったりしているということが観察されることもまた事実だからである。個性を超越することと、個性を形作ったり、強めたりするという2つの傾向は、正反対のものとしてではなく、一対のものとして見なければならぬ」⁸⁶とマズローはする。

つまり上項までとは別の傾向として、「泰然としていながらも、かつ欲求の同一視ができており、更には他者と深遠なる相互関係を持つことができるということが同一の人間内で生じているという傾向が、確かに健康な人々において全て同居して見られるのである。事実、自己実現しつつある人々は最も個性的であるにも拘らず、最も利他的で、更には社会や全人類を愛するということが同時に観察されるのである (The fact is that self-actualizing people are simultaneously the

75 Love in Healthy People., p.88.

76 Love in Healthy People., p.88.

77 Love in Healthy People., p.88.

78 Love in Healthy People., p.88.

79 Love in Healthy People., p.88.

80 Love in Healthy People., pp.88-89.

81 Love in Healthy People., p.89.

82 Love in Healthy People., p.89.

83 Love in Healthy People., pp.85-87.

84 Love in Healthy People., p.86.

85 Love in Healthy People., p.86.

86 Love in Healthy People., pp.86-87.

most individualistic and the most altruistic and social and loving of all human beings.)」, と⁸⁷。

(ぬ)「自己実現における二分法の解決」⁸⁸

＜小生注；即ち単なる利己主義でも、全てを自己犠牲する、ないしは没我ともいうべき状態のことをマズローは述べているのでもない。尊敬すると同時に面倒を見、尊重しながらも自と他との欲求が統合するという特性が観察されるのである。＞ 通常の文化圏では、こうした傾向は両端にある、相反するものとして言われがちである。しかし「こうした二極性や二分法と考えられてきたものが、健康ではない人々によってのみ見られるという結論を出せよう」⁸⁹、と。もって「利己性と非利己性 (selfishness - unselfishness)」⁹⁰、「個人主義と社会的感覚 (individualism - social mindedness)」⁹¹、「真面目さとユーモア」⁹²、「神秘的なものと現実的なもの」⁹³、これらは平均的な人間では二分されているものの、自己実現者においては、統合されているのであるとマズローはする。

纏めとして彼は、平均人と比較して「自己実現しつつある（精神医学的に言えば健康な）人々」⁹⁴が見せる、つまり「十分に円熟した人々は、2つの全く異なる種類の人々が2つの全く異なる心理学 (two very different psychologies) を生み出すかのように私には思えてしまうのと同じくらい、その様は平均的な人々とはあまりにも異なっているように思える」⁹⁵とする。そのため、現在までの多数派を占めてきた「この十全ではない心理学 (The cripple-psychology)」⁹⁶から、今後は、「健全で自己実現しつつある人々の研究を基礎としたもの (be based upon the study of healthy self-actualizing people)」⁹⁷としていかななくてはならないとし、この報告書を結んでいる。

さて、上記までのマズロー 1953 年報告書の自己実現と関連する箇所を簡潔に整理すると、次のようになろうか。

＜ a ＞ 当時、稀な研究テーマであったとする人の愛情に関する調査を彼は行った。そうした

87 Love in Healthy People., pp.85-86.

88 Love in Healthy People., pp.90-91.

89 Love in Healthy People., p.90.

90 Love in Healthy People., p.90.

91 Love in Healthy People., p.90.

92 Love in Healthy People., p.90.

93 Love in Healthy People., p.91.

94 Love in Healthy People., p.59.

95 Love in Healthy People., p.91.

96 Love in Healthy People., p.91.

97 Love in Healthy People., p.91.

ところ、下位4欲求（安全、所属、自尊心欲求などの欠乏動機）が充足され、第五欲求である自己実現（成長動機）段階に至っていると思われる人間たち（つまり、精神医学的に健全な人＝自己実現者）には、平均的な人間と比較してある特徴が顕著に観察されたとする⁹⁸。

< b > すなわち、彼らには共通して次のような行為が明瞭に観察されたとする。それとは、「相手の欲求をあたかも自分自身の欲求として感じ」⁹⁹、そうした他者の「面倒をみること、責任

98 ただしマズローは、1940年代時点で、既に自己実現欲求と他の欲求とが異なるものとして、欲求2分類を明示していたことにも留意されたい。例えば、1949年の論文“The expressive component of behavior”, *Psychology Review.*, 56., p.263. には、次のように書かれている。(so different from the ordinary needs for safety or love or respect, that they ought not even be called by the same name. If the wish for love he called a need then the pressure to self-actualize ought to be called by some name other than need, since it has so many different characteristics. Since this is not the place for detail, we shall restrict ourselves to pointing out the one main difference most pertinent to our present task, namely, that love and respect, etc. may be considered as external qualities which the organism lacks and therefore needs. Self-actualization is not a lack of deficiency in this sense. … (中略) … Or, to say it in another way, self-actualization is growth motivation rather than deficiency motivation.) 自己実現段階まで進んだ者の動機は、「安全、愛、あるいは承認に対する通常の欲求とはあまりにも大きく異なるので、それらは同じ名によって呼ばれるべきものですらないのである。もし、愛に対する願望が欲求と呼ばれるのであれば、そうならば、自己実現しようとする力は非常に多くの異なる特徴を有しているがために、それは欲求と言うよりも、むしろ別の名で呼ばれるべきものである。詳述するほどの余白がここではないため、現在の研究と最も関わってくる1つの主たる相違点を指摘するがまでに私たちは自分に歯止めをかけなければならない。つまりは、愛や尊敬などのものは有機体に不足しているがために、それ故に欲せられるという、外的な質のものとして捉えられよう。自己実現は、こうした意味での欠乏という不足したものの類ではない。(中略) 言い換えれば、自己実現は、欠乏動機というよりは、むしろ成長動機なのである。」

同様の言葉は、マズローの1950年論文 *Self-Actualizing People: A Study of Psychological Health., Personality Symposia: Symposium #1 on Values.*, New York: Grune & Stratton., p.20. にも見られる。「(It seems probable that we must construct a profoundly different psychology of motivation for self-actualizing people, i.e. expression - or growth-motivation - rather than deficiency-motivation. Indeed, it may turn out to be more fruitful to consider the concept of “motivation” to apply *only* to non-self-actualizers. Our subjects no longer “strive” in the ordinary sense but rather “develop.” They attempt to grow to perfection and to develop more and more fully in their own style. The motivation of ordinary men is a striving for the basic need gratification which they lack. But self-actualizing people in fact lack none of these gratification ; and yet they have impulses. They work, they try and they are ambitious even though in an unusual sense. For them motivation is just character-growth, character-expression, maturation and development ; in a word self-actualization.)

おそらく我々は、自己実現しつつある人間の動機を念頭に、すなわち、欠乏が故に動機づけられることというよりもむしろ、成長のために動機づけられていること、ないしは表出という、全く異なる心理学を構築していかなければならないと思われる。事実、非自己実現者“のみ”にあてはまる「動機づけ」なる概念を考えてみることで、より実りのある結論を得られるかもしれない。我々の被験者たちは最早、通常感覚でいうところの「奮闘」などしておらず、そうではなく「展開」していると言えよう。つまり彼らは、完全さへと向かって成長し、彼ら自身の型に基づいたかたちで一層十全たろうと展開しているのである。通常の人々に見られる動機なるものは、彼らに不足している基本的欲求を充足せんとするがための奮闘なのである。しかし自己実現しつつある人間たちにとっては、実際、それらの充足がもう十分な状態にある。しかし、それでも彼らには衝動がある。一般的な意味のものとは異なるものに基づいて、彼らは働き、挑戦し、大望を抱いている。つまり、彼らにとっての動機づけとなるものは、まさに特性の成長、表現、成熟、展開と呼ぶべきものであり、これを自己実現と一言で言いあらわせよう。」

99 Love in Healthy People., p.75.

を持つこと¹⁰⁰, そうして「他者の成長に熱心であること」¹⁰¹という「欲求の同一化」¹⁰², ないし「利他愛」¹⁰³ともいうべき行動の表出がはっきりと観察されたこと。勿論, 人間はみな種々の難点を有しているものの, それでも彼らは「相手の欠点や弱点を許せること」¹⁰⁴ができ, 彼らの成功にも「妬みがなく」¹⁰⁵, 「私利私欲のない称賛」¹⁰⁶を表していた。そうした彼らは, 「善良さ, 良識, 友情, 思慮深さ」¹⁰⁷, 「正直さ, 善意, 親切さ, 勇気のような性格的傾向を重視」¹⁰⁸し, なにより, 「全人類を愛するということ」¹⁰⁹が観察された。しかも, そうした事柄を「遊び心」¹¹⁰をもって行っていたことが観察されたというのである。

Ⅲ. 調査からマズローが力説した課題 (1954年の記録から)

反覆とはなるが, マズローはこれら“非自己中心的愛情”を示すことと, それを体現している人が誰であったのかに関する調査から得た知見に基づき, 今後自分がなさねばならない課題を1954年のペーパー「正常, 健全, 価値 (Normality, Health, Values)」¹¹¹や, 同じく1954年「科学への心理学的アプローチに関する諸原理 (Elements of a Psychological Approach to Science)」¹¹²等の書き物にて公言している。

その中で, マズローは「どのようにして人は賢くなり, 円熟し, 親切になり, 良い嗜好を持ち (to be wise, mature, kind, to have good taste), 創造的になり, 良い性格を持ち (to have good characters), 新しい状況に彼ら自身を適合できるようになり, 善良さをあらわし (to detect the good), 真実を探し求めること美や本物を知ることを学習するのだろうか」¹¹³, 更には, 「どのようにして私は良い人間となれるのだろうか (“How can I be a good man?”)」¹¹⁴等, こうした事柄

100 Love in Healthy People., p.75.

101 Love in Healthy People., p.80.

102 Love in Healthy People., p.75.

103 Love in Healthy People., p.84.

104 Love in Healthy People., p.62.

105 Love in Healthy People., p.80.

106 Love in Healthy People., p.84.

107 Love in Healthy People., p.89.

108 Love in Healthy People., p.89.

109 Love in Healthy People., pp.85-86.

110 Love in Healthy People., p.79.

111 この書き物は, 「総合教育基金 (The Foundation for Integrated Education)」の協力により, ニューヨーク大学にある科目「知の最前線: 科学と哲学そして教育の統合的概念 (The Frontier of Knowledge, Integrative Concepts in Science, Philosophy, and Education.)」の一講義のために準備されたものであると説明されている (同著 p.75.)。以下より, 当該原稿を The Frontier と略記する。

112 *Motivation and Personality.*, pp.1-12.

113 *Motivation and Personality.*, p.364.

114 The Frontier., p.81.

を我々は真摯に考究し始めていかなければならないとする¹¹⁵。彼は、これまでの心理学なる学問が「まさに広範囲に渡る完全なる失敗 (very largely a complete failure)」¹¹⁶ 続きだったのではないかと問う。なぜなら、人と人とが如何様に「平和を作り上げ (the winning of the peace)」¹¹⁷、協働を形作っていくかということよりも、競争して「争いに勝つことだけを強調してきた (stressed only the winning of the war)」¹¹⁸ と猛省を促す。そして、そうした姿勢そのものを変えなくてはならない時期が来ているとする。

彼曰く、その際の実験は実際に観察できた「一般的な大学生 100 人のうちの一人、この一人は最良の学生であり (精神医学的に言えば最も健康な 1%)、その人を意図的に用いること」¹¹⁹ をしなければならぬと 1953 年報告書と同様の点を再び強調する¹²⁰。

このように「自己実現しつつある人々、心理的に健康な人々、円熟した人々、充足された人々を用いた (the use of the self-actualizing, the psychologically healthy, the mature, the fulfilled)」¹²¹ 調査に着手し、つまり彼らを被験者とする事で、「私たちは今や、人間は何であるかだけでなく、人間は何になりえるかも知ることができている (we can now see not only what man is, but what he may become)」¹²²、即ち、「これは人間の最良状態に関する研究 (for studying the human being at his full height)」¹²³ であるとし、そうして生まれてくる「心理学への積極的なアプローチによって生じてくる種々の課題 (Problems Generated by a Positive Approach to Psychology)」¹²⁴ こそが、心理学者が本来取り組むべき課題であるとマズローは大喝する。

そうした心理学者たちが本腰を入れなければならない職分には、具体的には次のようなものがあるとマズローはする。つまり再度、彼は「非自己中心なものに関する研究はどこにあるという

115 ただし、マズローは 1940 年にはブルックリン大学にて「正常な人格 (The Normal Personality)」なる授業を受け持つなどして、精神医学的に健全な人間についての関心の片鱗を 10 年以上も前からはっきりと見せていた。これについては、Hoffman, E., *The Right to be Human.*, Jeremy P. Tarcher, Inc., 1988., p.131. を参照のこと。

116 *Motivation and Personality.*, p.375.

117 *Motivation and Personality.*, p.376.

118 *Motivation and Personality.*, p.376.

119 *Motivation and Personality.*, p.361.

120 ただし後年マズローは、自己実現は若者には生じにくく、年配者たちに多く観察される傾向があることを補遺している。このようにある。“on self-actualization I have removed one source of confusion by confining the concept very definitely to older people. By the criteria I used, self-actualization does not occur in young people. In our culture at least, youngsters have not yet achieved identity, or autonomy, nor have they had time enough to experience an enduring, loyal, postromantic love relationship, nor have they generally found their calling, the alter upon which to offer themselves.” と。詳細は、*Motivation and Personality* 2nd (1970) の序文 p.xx. を参照のこと。

121 *Motivation and Personality.*, p.361.

122 *The Frontier.*, p.77.

123 *Motivation and Personality.*, p.361.

124 *Motivation and Personality.*, p.364.

のか (Where are the researches on unselfishness?)¹²⁵ と問う。具体的には、先の「愛の同一視 (love identification)」¹²⁶ や「妬みのないこと (Lack of jealousy)」¹²⁷、「寛容さ (tolerance)」¹²⁸、「他者への関心 (concern for the other fellow) についての研究」¹²⁹ 等がこれまで全く行われてきておらず、そうして「協力, 利他主義, 友情, 非自己中心性 (coöperation, altruism, friendliness, unselfishness) よりも, 競争について多く研究されている」¹³⁰ と警鐘を鳴らす。事実, 「親切, 寛大, 慈悲心, そして慈善 (Kindness, generosity, benevolence, and charity) は, 社会心理学の教科書等の中では殆ど何も扱われていない」, と¹³¹。そうした今こそ「善良な人間 (the good man), (中略) 民主的な性格 (the democratic character), (中略) 哀れみ深さや寛大さ, そして親切さ (the compassionate, the generous, the kind), (中略) 聖人 (the saint), そのほか人間性に関する良い見本ともなる人間についての研究が求められている」とする¹³²。ただし歴史的に見ると, 「科学に関わる独創的な理論家たちは, 科学を本質的には, 人類を助けるための一手段として時に捉えていた (the original theorizers of science often thought of science primarily as a means to help the human race.)」¹³³ こと, 加えて「人類への愛情をより強く抱くことが, 科学に携わる多くの人間たちにとっての, 主な動機づけとなっていることはよく見られることである (even more strongly the feeling of love for human beings may often be the primary motivation in many men of science.)」¹³⁴ とも彼は補足し, 将来への希望的な願いも含めつつ, 生涯をかけた非自己中心性に関する研究に粉骨砕身していくことになる¹³⁵。

IV. むすびにかえて

本稿では, マズローによる自己実現者に見られる調査, なかでもその対人関係に関する研究に着目して話を進めてきた。これらから次の点が指摘できよう。

(α) マズローの「自己実現」概念は, 自己啓発本等で目にしがちな, 単に自己の潜在能力を発揮するという幼稚で利己的な生き方を助長しかねないものとは全く異なる, 別の人間像が明記されていた。もってこうした親切心, 愛の同一視, 他者の成長に熱心で, 相手の成功を心から喜

125 *Motivation and Personality*, p.377.

126 *Motivation and Personality*, p.377.

127 *Motivation and Personality*, p.377.

128 *Motivation and Personality*, p.377.

129 *Motivation and Personality*, p.375.

130 *Motivation and Personality*, p.373.

131 *Motivation and Personality*, p.375.

132 *Motivation and Personality*, p.377.

133 *Motivation and Personality*, p.2.

134 *Motivation and Personality*, p.3.

135 *Motivation and Personality*, p.377.

ぶ等の説明を併記することなしに、単に自己中心的な色彩のみでマズローの自己実現論を語る著者たちの言葉は誤りであると言えよう。なぜならマズローの言う自己実現は、個性を捨ててはいないものの、そうした泰然性の基礎には、他者との健全な連携、協働等が前提、土台となって自己の有する能力を発揮しているということが明瞭にされていたからである。視座の中心が、自己のみにあるのではないことが、マズロー自身によって再三繰り返されていたことに留意されたい。

(β) その際の基礎は（人口の1%をモチーフにしていたとはいえ）、現実を基としたものであったことを失念してはならない。つまり、自己実現段階にいると思われる実際の人間を被験者としたデータであり、もってこれは単なる絵空事ではなかった。そうして、この最高次段階にいる人間が見せる健全性、利他性、愛他性等にこそ、今後の心理学は焦点を当てていかなければならないことがマズローによって始終明言されていた¹³⁶。

しかしながら、如何様にして同概念を社会・企業組織に展開したり、そのように人を動機づけていくことが出来ようか…という次なる具体的な課題が浮かび上がってこよう。

(γ) 更には、下のような疑問も残っている。それとは、愛する配偶者のため、友人のため、知人のためであれば何をしても良いのか…という懸念である。つまり、何を基にして生きるのか…という普遍的な価値基準のようなものが、未だマズローによって示されていないと言えよう。友人のために反社会的な行為をすることは、マズローの主張から鑑み如何なことなのか。彼が1953年報告書の中で「この研究は未だ進展中である」¹³⁷と既述していたように、後に、マズローもこの点を強く意識するようになっていき、B価値論やZ理論を力説するようになっていくが、これに関する考察は別稿に譲りたい。

※ 神奈川大学に赴任して以降、小生は岡村勝義先生から数多くの助言を頂いてきた。ここに記し、謝意の一端を表したい。

136 マズローは自己の研究生活において、生涯にわたって影響を及ぼした経験の1つにブラックフット族での利他的な文化を挙げている。これは、彼が文化人類学者R. ベネディクトに勧められて1938年に行った調査であり、そこで彼が目にしたこと、体験したことが克明に記録されている（最終頁の手書き箇所より推定されうる1945年に書かれたと思われるA4判41頁に及ぶ調査報告の草稿「北方ブラックフット族の文化とパーソナリティ（“Northern Blackfoot Culture and Personality”）」（John J. Honigmann との共著）を参照されたい。

137 Love in Healthy People, p.58.